

Title	万葉集における「おもふ」について
Sub Title	On the verb "omo-u" in Manyoshu
Author	土田, 将雄(Tuchida, Masao)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1963
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.16, (1963. 10) ,p.1- 16
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00160001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

萬葉集における「おもふ」について

土 田 将 雄

萬葉集二十巻の中で、「おもふ」「もふ」及びこれらから派生する語、或は他の言葉と熟合してできている語は、きわめて高い頻度をもって使われている。諸本によって訓を異にする場合もあるが、正宗敦夫氏の萬葉集総索引によって調べてみると、九百八十八回を数え、歌数にしては八百四十六首に達する。(註一)

「おもふ」という言葉はごく普通のものであり、現在でも殆ど同じような意味に使われている。もはや意味は浮動せず、安定した言葉であって、時代とともに小さきみにでも変化してゆくような弱いものではない。したがって多くの註釈本をみても、「おもふ」が別の言葉にいいかえられて解釈されるということはまずないといってよく、殆どが「おもふ」は「思う」でとれているのである。そこには何か不動のものが感ぜられ、萬葉時代から現代に至るまでの不変の言葉として共通のものをもっていると考えられるのである。

しかし他方では、この「おもふ」という言葉がその意味を変えず、今もそのまま同じように使われているということは、各時代の人

人の実の思いが不変だということにはならないであろう。「おもふ」という言葉で表現された人人の心はむしろ目まぐるしく変転しているのである。時代により、人により、又同一人でもその時時によって使う言葉は同じ「おもふ」であるが、その「おもふ」この内容はすべて異っている。それはあたかも「おもふ」という言葉は一つの巨大な鏡であって、時代の流れに沿ってゆく人々の心を刻とうつしてゆく、そういうようなものと考えられないであろうか。その流れは時々刻々と無限にその様相を変化してゆくのであるが、これらはすべて「おもふ」という鏡に投影されてゆくのである。「おもふ」という言葉が時代を通じて生命が長く、普遍的であればあるほど、変転する時代の中に喰い入り、人の心の内部をうつしました。そしてまた人人はこの言葉に自分のすべてを托そうとするのである。各時代の作者が現実の姿を表現しようと試みる時、あるいは表現しながらでも、実際には自分の思っていることと対決しなければならず、そしてやがては思うこと自体に反省をむけるのである。作者は「おもふ」と遭遇し、また思う自己とぶつかなければならない。ここに作者の像がうかびあがる時があり、これがまた作者研究の一つの道として、「おもふ」にうつされた像を探ってみることができると考えられる所以となるのである。

尚この論文においては特定の主要作者についてのみ考察することにしてゐる。それは「おもふ」という言葉の性質上、個人として作歌した作者をえらぶべきであるし、またそれで十分に歴史の流れをたどることが可能であるからである。主要作者としてまず二十五首以上の作歌のあるもの、柿本人麻呂、笠金村、山部赤人、大伴旅人、山上憶良、大伴家持、大伴坂上郎女、笠女郎、大伴池主をとりあげ、これに加えて人麻呂までの作者を近江時代以前の初期萬葉作者として一括して述べ、また大伴家持の弟書持を大伴家の一族の故をもつて加えた。初めにこれらの人々の歌の総数と「おもふ」のでてくる歌の数及び回数を表にして示すと次の如くなる。

人名	総歌数	「おもふ」のでてくる歌数	回数
初期作者	三〇	八	一〇
柿本人麻呂	九二	二七	四一
笠金村	三二	五	六
山部赤人	四九	一一	一一

大伴旅人	七六	八	九
山上憶良	七二	一一	一五
大伴坂上郎女	八四	二一	二二
大伴家持	四六二	九九	一一三
笠女郎	二九	一三	一三
大伴書持	一一	二	二
大伴池主	二八	一三	一七
初期萬葉作者			

初期萬葉作者といっても、ここでは「おもふ」という言葉を用いている作者に限られているわけであるが、その用法を調べてみると、後の人々にでてくる一般的なものはすでに存在していることに気がつく。

秋山の樹の下がくり逝く水の吾こそ益さめ念はずよりは(註四)(一・九二)

玉葛花のみ咲きて成らざるは誰が恋あらめ吾は恋ひ念ふを(一・一〇二)

の如き歌の中で「おもふ」は愛情を示すものであり、

人はよし思ひ止むとも玉纒影に見えつつ忘らえぬかも(二・一四九)

という倭太后の歌の「おもひ」は故人に対する追憶の意であって、後にもしばしばでてくるものである。また初期萬葉作者の中で「おもふ」という言葉を巧みによみこんだ軍王について考えてみると、「おもふ」を外形的には意識して使いこなしたが、その内容は他のものと異なるところがなかったといえるのである。

霞立つ 長き春日の 暮れにける わづきも知らず 村肝の 心を痛み 鶉子鳥 うらなけ居れば 王禰 懸けのよろしく 遠つ神
 わが大王の 行幸の 山越す風の 独居る わが衣手に 朝夕に 還らひぬれば 丈夫と 思へる吾も 草枕 旅にしあれば 思ひ
 遣る たづきを知らに 網の浦の 海処女らが 焼く塩の 念ひぞ焼くる わが下ごころ(一・五)

軍王の歌は長歌一首、短歌一首にすぎないが、その長歌の中に「おもふ」が三回使われている。この長歌を反復口誦してみると、後半に三回たつづいでくる「おもふ」という言葉に何か律動的なものが感ぜられるのは、単なる主観的なものだけではないであろう。しかもこのことを一度心にとどめて読んでみると、「おもふ」を起点とした、たたみかけておいてくるようなリズム感があることに注意され、「おもふ」はきわめて効果的であるといえる。しかしこれらの三つの「おもふ」を意味の上から考えてみると、いずれも普通のもので、「丈夫と思へる」といういい方も、うれいをはらすという意味の「思ひ遣る」も後にしばしばでてくるもので問題がない。三番目の「思ひ」は「火」とのかけ言葉として使われているようであるが、意味は明らかに愛情を示すものであり、その用法においてこそ「おもふ」を使って調子の上での巧みさはあるが、「おもふ」という言葉の内容自体にそれほどの深さはないといふべきである。

柿本人麻呂

結論的にいうと人麻呂は「おもふ」という言葉をごく普通の意味でしか使っていない。しかしかれの歌全体に「おもふ」は数多くでてくるので、いはば「おもふ」を駆使したともいえるのはある。今分類によってその用法を示すと次の如くなる。

「丈夫と思へる」「見むと思へやも」の如く「……とおもふ」の形で十四回、「古思ふ」「逢ひし日思ほゆ」の類が四回、「思ひしなえて」「めづらしみ見ふ」の如き熟合動詞が十回、^(註五)儀礼上の慣用的用法とみられる「いかさまにおもほしけめか(思ひをれか)」「二回、愛情を含む「おもふ」が六回、その他五回、全部で使用回数は四十一である。その他五回というのはそれぞれ違った意味で使われているわけで、次にそれを示してみよう。

……春鳥の　さまよひぬれば　嘆も　いまだ過ぎぬに　憶もいまだ尽きねは(憶毛未不尽者)　言さへく　百済の原ゆ　神葬り　葬り
りいまして……(二・一九九)

……うつせみと　念ひし妹が　玉かぎる　ほのかにだにも　見えぬ思へば(塙籠谷裳不見思者)　(二・二二〇)
衾路を引出の山に妹を置きて山路念ふに生けるともなし(二・二二五)

稲日野も行き過ぎがてに思へれば心恋しき可古の島見ゆ(三・二五三)

み熊野の浦の浜木綿百重なす心は念へど直に逢はぬかも(四・四九六)

「憶もいまだ尽きねば」の「おもふ」になき人をしのお追憶の意があることは明らかである。しかし必ずしも原文に「憶」が使つてあるからではないであらう。例えば「をとめらが袖布留山の水垣の久しき時ゆ思ひき吾は(憶寸吾者)」の歌は相聞であり、この「憶」は追憶ではない。

「見えぬ思へば」沢瀉氏の萬葉集注釈には「見えなく思へば」とよまれている。このほうが他に類例もあり、一般的である。「見えぬ思へば」というのはこれ一例しかない。

「山路思ふに」沢瀉氏の訓釈に「その引手の山の山路を思ふに、の意。前の「山路を行けば」であれば作者がその山路にある事が明らかであるが、「思ふに」では作者の位置が明らかでなく、家にあつて思ひやるやうにも見え、これまた前者の切実さに及ばない」としておられる。確かに作者と位置ということに焦点をむけるとはつきりしないことがある。しかし今「おもふ」ということに注目すると、やはりこの言葉に相富の重みがあつて、「山路をゆけば」とは簡単にとりかえることを許さぬように思われるのである。

「行きすぎがてに思へれば」普通に「行きすぎがたく思つて」と、可古の島も見える」と訳されているが、沢瀉氏は「印南野の景にも心惹かれてゐるに又前方には——といふ意であるから逆接に近い心持で用ゐられてゐる」ともいつておられる。印南野と可古島の対立とともに、「おもふ」と「見ゆ」との対立もあつてこの歌はできているのではないかと思う。(註六)

今人麻呂の歌の中でも、その用法が一首だけに限られているものについて考察してみたが、案外に「おもふ」という言葉にウエイトをおいて考えてみなければならぬことがあるように思われる。これはたとえ無意識的であつたにせよ「おもふ」ということに深くかわりをもつようになったことを示すものであるといつてよい。しかし「おもふ」が意識せられ、歌の中心におかれるようになるまでは、まだほど遠いといわなければならないのである。

山部赤人

赤人の歌で「おもふ」のでてくる歌は全部で十二首ある。前記の分類にならって列挙してみると次の通りである。

「…とおもふ」の形

… とも 時かむとぞ思ふ (三・三八四)

… 見せむと念ひし梅の花 (八・一四二六)

名詞十「おもふ」の形

… 哭のみし泣かゆ 古思へば (三・三二四)

… 家念はざらむ (六・九四三)

… 大和し念はゆ (三・三五九)

… 手兒名し思はゆ (三・四三三)

… 玉藻潮干満ちて隠らひゆかば念ほえむかも (六・九一八)

他の動詞と熟合した形

… 立つ霧の念ひ過ぐべき恋にあらなくに (三・三二五)

… 一日も君も忘れて念はむ (六・九四七)

愛情の意味をもつ名詞として

… 念ひぞわがする 逢はぬ兒ゆえに (三・三七二)

… 隈も置かず 憶ひぞわが来る (憶曾吾来) 旅のけ長み (六・九四二)

最後に若干問題になるものとして

歌思 辞思為師 (三・三二二) がある。この訓は、武田氏は「うちしのび ことしのびせし」とされたが、その他は「うたおもひ

ことおもはしし」となっている。後者の場合は「おもふ」は工夫するという意味になるが、他にこのような用例がないので、問題が残

ると思う。

そこで最後の歌は別としても、一般的に赤人の「おもふ」の用例は無理がなく、類型に従っていることがわかる。赤人の明るさ、流麗とした清澄な趣の理由として言葉に癖のないことがいわれるとすれば、このことから背けるのではないだろうか。

笠 金村

金村の歌は全部で三十二首、その中で「おもふ」のでてくる歌は五首、回数は六回にとどまる。金村は人麻呂、赤人に続く宮廷歌人の一人であるが、新味に乏しく、前の人人のあとを追うにすぎないといわれているが、「おもふ」の用法についても、とりたてて新奇な点はなく、類型的であるといえよう。即ち

…草枕旅をよろしと思ひつつ（四・五四三）

…公が家なる尾花し念ほゆ（八・一五三三）

…むつまじみ吾は念はず（四・五四三）

…人皆の念ひやすみて（六・九二八）

…手弱女の思ひたわみて（六・九三五）

…気の緒にわが念ふ公は（八・一四五三）

これを見てもわかるとおり、「おもふ」に与えている重みは軽いものである。勿論金村は萬葉歌人としてきわだっている一人であるが、他を追随したといわれる理由の一つには、こうした一つの言葉に対しても心のこもった深みを与えることにそれほど成功していないからではないだろうか。新しい、奇をてらった言葉を使う必要はないが、ありふれた言葉からも新しい心は感ぜられなければならない。

大伴旅人

旅人の歌は七十六首、その中「おもふ」のでてくる歌は八首、回数は九となっているから、決して頻度は高いといえない。今その使い方を左に示してみよう。

浅葉原つばらつばらにもの念へば故りにし郷し念ほゆるかも(三・三三三)

験なき物を念はずは一杯の濁れる酒を飲むべくあるらし(三・三三八)

梅の花夢に語らくみやびたる花と吾念ふ酒に浮べこそ(五・八五二)

若年魚釣る松浦の河次の竝にし念はばわれ恋ひめやも(五・八五八)

やすみししわが大王の食す国は大和も此処も同じとぞ念ふ(六・九五六)

大和道の吉備の児島を過ぎて行かば筑紫の児島念ほえむかも(六・九六七)

丈夫と念へる吾や水茎の水域の上に涙拭はむ(六・九六八)

沫雪のほどろほどろに降り敷けば平城の京し念ほゆるかも(八・一六三九)

初めの二首を除いて他のものはいずれも前述の類型的な用法であって、歌としてはともかく「おもふ」については問題がないであろう。したがって旅人の「おもふ」に特色のあるのは「つばらつばらに物念へば」と「験なき物を思はずは」である。後者は「験なき物を」とあるので一応「おもふ」の志向する意味内容は明らかであるが、初めの「つばらつばらに物念へば」は問題となる。下句の「故りにし郷し思ほゆるかも」と対比して考えると、上句では物おもいという一つの心理状態に目がつけられているということが出来る。

「ものもふ」あるいは「ものおもふ」といういい方は、用例を調べてみると、巻十、十一に多く、相聞歌に使われた場合が多い。しかも「ものもふ」は恋そのものではなく、恋による「物もい」と考えられるのであり、つまりそこには一つの客観化があるといえよう。前記の諸作者の中で「ものもふ」という言葉を使ったのは旅人を始めとして、大伴家持、大伴池主及び笠女郎のみで他の作者にはなく、この言葉の特殊性がうかがえる。旅人の歌に感ぜられる自己を突放したような趣は、その一つのあらわれとして、この「ものも

ふ」のもつニュアンスが語っているのではないだろうか。

山上憶良

憶良の歌は総数七十二首、「おもふ」のでてくるのは十二首、十五回である。これらを今までの分類法によってわけてみると、「おもふ」のように「おもふ」の内容がはっきりしているものが六回、「おもはゆ」の形をもち、「おもふ」の志向する対象が示されているのが二回、「おもひわづらひ」(五・八九七)、「おもひたのむ」(五・九〇四)の如き熟合動詞が二回、また成句として用いられ、「期待しないのに」という意味の「心ゆも思はぬ間に」(五・七九四)、「思はぬに」(五・九〇四)及び「思ふそら」(八・一五二〇)というのがある。しかしこのほかに既述の分類法によらず憶良が独特の意味を含めながら使っているように思われるものとして次の二首がある。

うち日さす 宮へ上ると たらちしや 母が手離れ 常知らぬ 国の奥処を 百重山 越えて過ぎ行き 何時しかも 京師を見むと
思ひつつ 語らひ居れど おのが身し いたはしければ 玉梓の 道の限廻に 草手折り 柴取り敷きて とけじもの うち臥伏し
て 思ひつつ 歎きふせらく 国にあらば 父とり見まし 家にはあらば 母とり見まし 世間は かくのみならし 狗じもの 道に
臥してや 命過ぎなむ (五・八八六)

荒雄らは妻子の産業をば思はずる年の八歳を待てど来まさず (十六・三八六五)

あとの歌は特殊の表現が使っているが、意味上からは「妻子の産業を」とあって「おもふ」の目的語が明らかに指示されている。これに対して前の歌は問題となる「おもふ」であろう。つまり対象がはっきりしていないのである。武田氏の全註釈では「道路のすみに草を積み木の枝を敷いて、床のようにしてころげ伏して、思いつつ嘆息して横たわって国にいたら父が見てくれるだろう、家にいたら」とあり、沢瀉氏の萬葉集注釈によれば「伏しながら歎き思ふには」となって、それ以下の句を内容としてうけていることははっきりさせている。日本古典文学大系の萬葉集の頭註も沢瀉氏と同じであり、訳としては大体ここにおちつくのであろうが、今「おも

ふ」それ自体を考えてみると、憶良の場合旅人のように「おもふ」という心理作用を客観化して「思ひつつ」と観照したということではないであろう。そこまで「おもふ」をつつこんで反省していないのである。ここに憶良の作歌の限界もあるように思われる。

大伴坂上郎女

坂上郎女は旅人の妹にあたるが、家持にとつては叔母でもあり、姑でもある。大伴一族のうちでは家持について多くの歌を萬葉集に残し八十四首を数える。郎女の歌には「おもふ」がでてくる歌は二十一首で、総数との割合は人麻呂について多い。また女性の歌として愛情の意をこめた「おもふ」が多いのは当然のことであろう。巻四の六一九の長歌、六二〇の反歌に怨恨の意の「おもふ」があるが、これは愛情が別の方向に働いたと考えられるのであり、郎女の性格を示しているといえることができる。今解釈上問題になる歌として巻四の七六一がある。

早河の瀬に居る鳥の縁を無み念ひてありしわが児はもあはれ

訓の上では諸注釈に相異はないが、解釈上に問題がある。日本古典文学大系の頭註によると、「〔大意〕 早い流れの河の瀬にいる鳥のとまる所が無いように、たよる所がなさそうな様子をしていたわが児が、重く心にかかる。○別解。早河の瀬にいる鳥のように、たよる所がないので、もの思ひしていたわが子よ。」となつていて問題が提起されている。

この相異は結局「縁を無み念ひてありし」の「なみおもふ」を熟合動詞の一種としてとるか、あるいは「よしをなみ」と「念ひてありし」をわけて解するかということによって生ずる。前者の場合「早河の瀬にいる鳥のように、縁がないと思つていた自分の子はまあ……」となり、後者は「早河の瀬にいる鳥のように、縁がないので、物思ひしていた自分の子はまあ」となるであろう。「なみおもふ」という用例は他になくこれだけであり、またこれでは歌自体も平凡な趣になってしまう。この点「よしをなみ、思ひてありし」とするほうが「おもふ」に重みがかかってくるので手ごたえがある。旅人の妹、家持の叔母であり、姑である坂上郎女としてはむしろ適当とさへ思われるのである。ただほかにこのような客観的な「おもふ」という心理作用に著目した歌がなく、また女性の歌としてそこまで

期待できないとなると、問題は再び出発点に戻ってしまうことになる。

大伴家持

家持の歌は萬葉集の殆ど四分の一を占め、更に「おもふ」という言葉のでてくる歌は九十九首、回数にして百十三回に及ぶことは前表の通りである。したがってその使用法も極めて変化に富み、百花繚乱の趣があるといつてよい。勿論前述の作者達の用いた一般的な形は家持にも多く、例えば「…とおもふ」十七回、「…おもほゆ」九回、熟合動詞十四回、また愛情を含めた意味をもつ「おもふ」に至っては半数近くを占めている。しかし家持の歌の特徴をかもしだす「おもふ」はこれらの形によっては十分に表現されていない。家持の「おもふ」はそれ自体にウエイトのかかった、反省的な客観視されたものである。それは旅人の歌に片鱗がうかがわれ、また解釈によっては坂上郎女にもあるものであるが、家持に至って明瞭に認めることのできるものである。以下このことについて詳述してみよう。

「…とおもふ」という形で「おもふ」が使われる場合、「おもふ」の志向しているもので明記されており、その対象が直接問題であつて、「おもふ」自体は未だそれほど反省されていないといつてよい。これは「おもふ」の用法の中で最も無理がないもので、沢山の例が見出される。他の作者においてもそうであつたように、家持の場合にもこの形を使った例は最も多い。しかし皆同じ味わいがあるとはいえず、そこにいくらかの違いがあるのは当然であらう。

相みては須叟恋は和ぎむかと念へどいよ恋ひまさりけり(四・七五三)

愛するものを眼の前にすれば、焼けるような恋心は和げられるであらうかしらと思ふもの、しかしそれにしてもいよ熾烈になる恋の情であることよ、という意味であらう。そしてこの場合の「おもふ」はそれほどの重みはなく、「ちらつと思つてはみるのだけれど」という程度である。しかし

今更に妹に逢はめやと念へかもここだわが胸おほほしからむ(四・六一一)

という歌になると「おもふ」の重みはよほど異なる。この歌は「胸のうつつとうしきの原因は、妹にもうあうこともあるまいと思ふことによるのであろうか」という意味であるが、胸の中のうつつとうしきを直接妹にあえないであろうということと結びつけず、そう思うからうつつうしいのかと「おもふ」と「うつつうしき」との関係を疑問視しているところに作歌の基盤がある。すなわちこの歌は「おもふ」を間にはさむことにより、効果的に人の心にうつつたえているといつてよい。

更に「おもふ」が他の動詞と結びついて使われることがある。例えば「おもひすぐ」「おもひこふ」「おもひわたる」のようなものである。これらは「おもふ」の内容を分析して把えたものといふことができる。しかしただ形式的に「おもふ」の種類を示しているばかりでなく、更に内容にもたちいつている場合もあり、その時は一つの動詞として印象される。例えば「思ひ出づ」「思ひやる」の如きであり、二つの言葉の単なる接合ではない。これに対して「おもふ」の特殊化として他の言葉を加えたと解されるものは「うれしと思ふ」「かなしみ思ふ」「忘れて思ふ」の如きものである。家持の場合この形は少い。「忘れて思ふ」が三回あるのみである。

「おもふ」が対人関係、特に愛情を示す場合が多いのは前述の作者についても見られるところであった。そして相手ははっきり記されていることもあり、しからざることもあるのは諸例によって明らかであるが、いずれの時でもその愛情をむける相手が志向され、意識されていて、愛する思いそれ自体がどうのこうのという歌はない。それ故「おもふ」の内容という点から考えれば、自己反省的なものではなく直情を示す単純なものである。

次に「おもふ」ということが、その内容とともに一つの心理作用として眺められるようになる過程として、名詞化された「おもひ」について考えてみよう。初めにその「おもふ」対象が明らかで、愛情を示す「かたもひ」「かたおもひ」について調べると、萬葉集中十一回用いられているうちで、巻十、十一、十二の相聞歌集にあるほかは、家持及びその周辺の人人で半分を占めている。同様なのが「したもひ」「したおもひ」という言葉についてもいえる。すなわち家持、池主に各一首あり、その他の二首は巻十一、十二からである。更にこのことは「おもひ」というより一般的な言葉において顕著である。全部で二十三回使われているうち、軍王、人麻呂、赤人に各一回となっているほかは、家持の歌に九回、家持周辺の人として書持、坂上郎女、笠女郎にあわせて五回、同時代の人に三回、そしてその他は巻十、十一、十二に各一回となっている。これから考えて、「おもひ」という名詞形は後期萬葉時代に入ってから使用

されだしたということはないが、この時代におけるこの言葉に対する傾向は示されている。そしてこの傾向とは名詞として使用することによる「おもふ」の抽象化であり、「おもふ」という心理作用が客観視されたことを示すものである。例えば次の家持の歌はどうであろうか。

うつせみは 恋を繁みと 春まけて 念・繁けば 引き攀ちて 折りも折らずも 見る毎に 情和ぎむと 繁山の 谿辺に生ふる 山
振を 屋戸に引き植ゑて 朝露に にはへる花を 見る毎に 念・は止まず 恋し繁しも (十九・四一八五)

山吹を屋戸に植ゑては見る毎に念・は止まず恋こそ益れ (十九・四一八六)

つまりここでは「おもひ」と「こひ」とが組み合わせられ、しかも同一長歌の前後に二回使われることによって歌を構成している。明らかに家持の技巧であるが、そこには「おもひ」という心理作用の客観化はもとよりさらに言葉としての抽象観念化にまでつきすすんでいることを示しているのである。

これまで述べた種々の「おもふ」の型は、他の作者にも見られるものであったが、それでも時代を経るにつれて変化があり、家持に至っては明らかに「おもふ」にもられる意味内容に深い陰影が感ぜられるようになった。それは「おもふ」という心理作用が志向する対象よりも、むしろ「おもふ」という作用そのものに歌の主題がむけられてゆくようになったからである。万葉後期を代表する家持の一つの特色はこの線にそって考えることができ、特に巻十九の最後の歌に結実している。

うらうらに照れる春日に雲雀あがり情悲しも独し念・へば (十九・四二九二)

この歌の中で「おもふ」は主役である。何故人は考えるのだろうか、思わずして過すこととはできないものだろうかということを一方にふまえながら、「おもふ」ことの感傷を歌いあげるわけである。「おもふ」という心理作用に著目することから、思わざるをえないという必然性に人を導き、更にこのように思わず何ものかとの対決に人をひっぱりこんでゆく。そしてこれが環境とか地位といった単なる歴史的背景のようなものに還元しえない時、人は自分自身に直面させられる。「ひとり念・へば」というのはこうした家持の心中の表現である。周囲の事情がこの歌をつくらせたといえれば歌の意に反する。むしろ人間の成長過程における自己との対決が万葉集歌人家持に示されたといえないであろうか。

大伴書持

家持の弟書持の歌は万葉集中に十三首あるのみで、しかも「おもふ」を使っている歌は次の二首にすぎない。しかし家持の周辺の人としてやはりあげるべき人であり、その上今まで問題としてきた点について考えるべきものがある。

長さ程をひとりやねむと君がいへば過ぎにし人の念ほゆらくに（三・四六三）

遊ぶ内の楽しき庭に梅柳折りかざしては念ひ無みかも（十七・三九〇五）

前の歌は家持の亡妻の歌に和うる歌であって「おもふ」の使い方も普通のものである。これに対して後者の歌の「念ひなみかも」の「おもひ」は看過することのできないものをもっている。二三の註釈にあたってみると

武田氏 万葉集全詮釈〔訳〕 思いがないことだろうなあ。〔釈〕 意毛比奈美可毛、この下に、アラムの如き語を省略した意であるが、この形のままで文を終止するものである。思いが無くてかあるだろうの意。この思と無とは、思いが無いのではなく、動詞無ミで、連用形と見られる。

日本古典文学大系本万葉集の頭註 ○思ひ無みかも——物思いがないであろうか。表現不足の句。

これによってみると大体さしたる意見の相異もないようである。しかし前述したところにして「おもひ」が歌の中で意味上に大きな比重をもつと考えてみると、「念ひ無み」は「遊ぶ内の楽しき庭に梅柳折りかざしてば」とならべて十分な重みをもち、むしろ歌を完結させるものを持っていることができるのである。それは「おもひ」が抽象されて独立したことによるといってもよいと思う。この独立した抽象性を家持の側近中の側近であり、かれの越中守時代の作歌において忘れることのできない大伴池主の歌によって更に確かしてみよう。

大伴池主

池主の歌は巻八に一首、巻十七に十六首、巻十八に八首、巻二十に二首、計二十七首となっており、万葉集作者の中でも数の多いほうにいれることができるが、特にその歌の各巻における分布からみて、家持の側にあり、家持について歌を作った場合が多いことがわ

かる。それ故家持の特色を側面からうつしだしているといふことがいえよう。今ここでとりあげてみたいのは次の歌である。

大王の 命かしこみ あしひきの 山野障らず 天離る 鄙も治むる 丈夫や 何かもの念ふ あをによし 奈良路来通ふ 玉梓の
使絶えめや 籠り恋ひ 息つき渡り 下念よ 嘆かふわが夫 古ゆ 言ひ継ぎ来らし 世の中は 数なきものぞ 慰むる 事もあら
むと 里人の 吾に告ぐらく 山傍には 桜花散り 貌鳥の 間なくしば鳴く 春の野に 葦を摘むと 白楸の 袖折り反し 紅の
赤裳裾引き 嬢子らは 念ひ乱れて 君待つと うら恋すなり 心ぐし いざ見に行かな 事はたなゆひ(十七・三九七三)
山吹は日に日に咲きぬ愛しと我が念ふ君はしくしく念ほゆ(十七・三九七四)

池主の歌で「おもふ」がでてくるのは十三首十七回であるが、ここに引用した二首のなかに五回を数えている。「下念」「念ひ乱れて」「我が念ふ」「念ほゆ」はだいたいにおいて愛情あるいは愛情を含む「おもふ」と考えられるのであるが、「丈夫や何かもの念ふ」は問題になる言葉である。この丈夫はいうまでもなく家持であるが、家持の「もの念ふ」は決して異性に対する愛情ではない。またそうでないからこそ池主は異性に関心をむけさせ、愛情を誘発し促しているのであり、何か憂悶に閉された家持の心情を思いやうっての歌であることがわかる。「丈夫や何かもの念ふ」という時、そこには「おもひ」にひきこまれた家持の姿があり、七年の年月を隔ててはいるが、後年の家持の前掲作「うらうらと照れる春日に雲雀あがり情悲しも独し念へば」の背景をなしていると思われるのである。

以上「おもふ」という言葉を材料として、万葉時代に一つの流れがあることが推定され、それは作者の心理が外の対象にむけられていくことから、次第に内の対象にむかうようになつてゆくことであると結論してみた。勿論後期の万葉時代は必然的に大伴家持及びその周辺の人人をもつて代表されることになるので、大伴家中心の議論になり、そこにこの時代すべての傾向をいうためには限界があるかもしれない。しかし万葉集がこの時代の中心的文学であるということになればこの推定も理由あることと思われるのである。

註一 この数の中には「或云」「二云」としてあげている歌も含めてある。

註二 武田祐吉氏の「時代順作者人名録」にしたがって近江時代以前に記されている作者の中、「おもふ」を何かの形で用いて作歌しているものは次の通りである。(括弧内は上が総歌数、下が「おもふ」のでてくる歌の数)

註三 木梨之輕太子(一、一)、岡本天皇(四、一)、軍王(二、一)、倭天后(四、二)、鏡王女(五、一)、額田王(一三、一)、巨勢郎女(一、一) 中二首は重出している。(四八八―一六〇六、四八九―一六〇七)

註四 歌の引用はすべて武田祐吉氏の訓を拜借した。

註五 山田孝雄氏「奈良朝文法史」の用語による。

註六 「心恋しき」ということを考えると、この歌は二つの対立をうたっただけでなく、さらに三段の心理過程を示しているとも考えられる。すなわち初めに心恋しく待ち望んでいた可古島があり、そこに印南野があらわれ、そして再び可古島に思いがかえってゆくのである。

註七 「ものもふ」「ものをおもふ」「ものもひ」の如き用例は五十一あり、作者の明らかなのは次の如くである。(括弧内はその用例を示す)

弓削皇子(一)、三方沙弥(二)、得名部皇女(一)、田口益人(一)、安倍女郎(一)、大伴旅人(二)、阿部継麻呂(一)、中臣宅守(五)、小治田広耳(一)、大伴家持(三)、笠女郎(一)、山口女王(一)、大神女郎(一)、文馬養(一)、大伴池主(一)

この中笠女郎、山口女王、大神女郎の歌はいずれも家持に贈ったものである。

註八 「おもふ」と「こふ」とをあわせ用いる例は家持に顕著である。例えば

六八二、七三三、三九六二、四〇〇六。